

# 実習から見えてきた保育学生の保育観

## —子どもの安全を守るための保育環境に着目して—

Views on Childcare Students connected from Childcare Training  
With a Focus on Childcare Environment to keep the Security of the Children

三宅 美千代

Michiyo MIYAKE

実習を経験した保育学生が、実習の中で捉えた子どもの安全を守るための保育環境や保育者の関わりについて明らかにすることを目的とし、子どもの健康と安全の授業内において質問紙調査を行った。その結果、主に生活や遊びの中など日常において子どもが安全に過ごすための保育現場での実際を見ることで、多くの学びが得られていたことが明らかとなり、本科目の授業の方向性にも示唆を得ることに至った。

キーワード：保育環境 こども環境 子どもの安全 保育観

### 1. はじめに

保育所保育指針「第3章 健康及び安全」においては、「子どもの健康及び安全の確保は、子どもの生命の保持と健やかな生活の基本であり、一人一人の子どもの健康の保持及び増進並びに安全の確保とともに、保育所全体における健康及び安全の確保に努めることが重要となる。」<sup>1)</sup>と示されており、保育者は子どもの健康や安全に関する知識の習得やその対応力が求められている。また同指針における「事故防止及び安全対策」について、「保育中の事故防止のために、子どもの心身の状態等を踏まえつつ、施設内外の安全点検に努め、安全対策のために全職員の共通理解や体制づくりを図るとともに、家庭や地域の関係機関の協力の下に安全指導を行うこと。」とされ、同指針解説においては「保育中の安全管理には、保育所の環境整備が不可欠であり、随時確認し、環境の維持及び改善に取り組む」ことが明記され、保育所での子ども理解を含めた組織的な取り組みや、安全な環境整備の

重要性も示されている<sup>1)</sup>。

幼稚園教育要領「第2章 ねらい及び内容」の「健康」の中では、「危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。」と明記され、同要領解説においては、「幼稚園生活の中で、危険な遊び方や場所、遊具などについてその場で具体的に知らせたり、気付かせたりし、状況に応じて安全な行動がとれるようにすることが重要である。」<sup>2)</sup>とし、生活安全・交通安全・災害訓練等を含め長期計画的且つ日常的に指導していくことの大切さが謳われている。

三宅(2021)は、「こどもの事故はこどもの発達と密接な関係がある」と述べ、「こどもの発達過程をよく理解し、的確な対応をすることにより防止可能な事故が多い」と、子どもの発達と事故の関係を踏まえ、安全な環境を作ることの必要性を指摘している<sup>3)</sup>。また同時に、「こどもの発達のためには、危険をゼロにするのではなく、こどもの主体的な行動を通して、安全な身のこなし方や安全な遊び方を身に付けさせる方

法を考えることと、重大な事故を防ぐために環境を整えることが大切」だとも著している<sup>3)</sup>。

そのような中、前田(2018)の「保育実習において学生が対応に困った経験に対する調査」によると、実習中に子どもの保健に関連した対応に困った経験があると答えた学生は40%にのぼり、その保健的事象の中には、「予測困難な事故」が挙げられ、「子どもの突発的で思いがけない行動により予測困難な出来事が生じた」ことへの考察が述べられていた<sup>4)</sup>。保育現場において、子どもの健康や安全の確保は保育者の最も重要な役割であり、保育学生も卒業するまでに、率先して子どもを守る立場だという自覚を持ち、知識を身に付け、保育者としての技術を高めることが求められる。そのため、それを踏まえ本研究においては、保育実習と幼稚園実習を終えた保育学生が、実習中に子どもの安全を守るために、保育者がどのような関わりをし、どのような環境の工夫をしていたかについて調査し、その保育学生の気づきから、どのようなことに心を動かし、保育観が育まれていったかを明らかにするとともに、今後の授業運営に役立てていく内容を検討していくこととして実施した。

## 2. 目的と意義

実習を経験した保育学生が、実習の中で捉えた子どもの安全を守るための保育環境や保育者の関わりについて明らかにすることを目的とした。それを明らかにすることにより、実習を生かした子どもの健康と安全の授業展開の、今後の示唆を得ることができ、それは本授業のさらなる充実となり、その先にある保育の質の向上へとつながる。

## 3. 方法

### 1) 調査協力者

A短期大学において、保育実習および幼稚園実習を経験した2年生のうち、質問紙調査回答

日である20XX年X月の研究者の第1回目の授業を受講し、本調査への協力に同意をした保育学生とした。

### 2) 調査手続き

質問紙調査用紙を授業時間内に配布し、授業時間内に回答してもらい回収した。

回収率は99%(回答者:112名)であった。質問項目に対する記入がなかった7名を除く105名分を有効回答数(有効回答率93.7%)として分析した。

### 3) 質問紙調査項目

質問紙調査は選択質問および自由記述を設けた。萱間(2007)は、「自由記述は『あり』『なし』という境界が微妙だったり、それだけでは言い尽くせないような内容や現象について尋ねるときに併用すると有効である」とし、「自由記述の分析を調査対象者の特性と組み合わせて考察することで、データはより多くのことを語る」と述べている<sup>5)</sup>。そのため、選択質問だけではなく、自由記述を併用することにより、保育学生が実習で感じた細かい情景なども収集しようという意図で進めた。なお、自由記述の項目は①子どもが危険に遭遇しないための保育者の関わりと②子どもが危険に遭遇しないような環境の工夫とした。

### 4) 自由記述の回答の分析

質問紙調査の自由記述の各項目の有効回答のみを分析対象とした。自由記述の回答はpost-codingの方式とし、分析方法はopen-codingを採用した。open-codingの規則は「何の研究のデータなのか」「データはどのようなカテゴリーを示唆するか」「このデータからいったい何が起きているのか」という3つの問いを念頭に置きコーディングを行う。また、open-codingは、データを一行ずつ、または一語ずつ解釈し、データに合致する概念を作り出すことであり、研究者が対象者の世界に関与していたり、経験的に熟

知していたりする場合、分析的距離をとる必要があるため、切片化という作業を行う。コード化は当事者によって発せられた言葉や当事者の行為を文字化したデータを研究者の言葉に置き換えることでもある。その後、帰納的なアプローチによりコードの集約を行い、類似のコードをカテゴリーに分類した。このような open-coding は先行研究が少ない領域で探索的に研究を実施する際に有効であるため採用に至った<sup>6)~9)</sup>。

## 5) 倫理的配慮

本調査は研究者の所属する機関における研究倫理規程に基づき申請書面を提出し、承認を受けて行ったものである。

## 4. 結果と考察

### 1) 保育者の関わりについて

子どもが危険に遭遇しないための保育者の関わりについては、自由記述により 182 の回答が得られた。回答の意味内容を変えないよう注意しながら、意味内容の類似性に従い分類し、抽象度をあげ 9 の【カテゴリー】を抽出した（複数回答有）（表 1）。

【声掛けによる危険回避】では、「危険な場所があれば、子どもと一緒に確認して説明」したり、「外に出るときは分かりやすく説明」するなど、「活動をする前に注意点を伝え」、事前の説明で子ども自身が危険を理解した上で行動に移せるような促しを行っていた。また「危ないことをしていた時にはすぐによって声掛け」をするなど、リアルタイムに子どもが危険に気づける対応を心掛けていた。

【全体を見渡す】では、「子どもの姿が全体的に見渡せるように体の向きに注意」したり、「目の前の子どもだけに集中せず、全体を見守る」など、保育者自身が視野を広げるとともに、自分の立つ位置にも注意を払っていた。

【健康を管理する】では、「園庭だけでなく、室内にいるときも水分補給させて」いたり、「暑

い日は日陰で遊ぶようにする」など、気温や湿度に合わせた健康管理を行っていた。また、「アレルギーの子どもの机を用意し、給食をダブルチェック」したり、「感染者を他の部屋に移動」するなど、個別の状況に合わせた配慮をすることで、園全体の危機管理にも備えていることが分かった。さらに、「午睡時の睡眠チェックを 5 分おきに行なう」ことなど、大きな事故につながらない管理も徹底されていた。

【すぐに手を出せる体制作り】では、「運動遊びの時に各項目に必ず保育者が一人いる」ようにしたり、「固定遊具や大型遊具で遊ぶときは保育者一人が付く」ようにするなど、事故を未然に防ぐ見守り体制を整えているとともに、いざ事故につながった時には、すぐに対応できるようにしていることがうかがえた。子ども側からは、近くに保育者がいることにより、安心して遊べる環境を得ることができていたように思われる。

【目を離さない】では、「年齢に合わせた保育者の数を配置し、常に目が届くようにしていた」り、「担任が席を外す時は、代わりの保育者が交代」するなど、その場に保育者がいないということが起こらないように徹底されていることがうかがわれた。また、「午睡中は子どもに背を向けず全体を見渡せるようにし作業」したり、「連絡帳など事務仕事の時でも子どもに背を向けないように」するなど、子どもに背中を向けないという体の位置や視線だけでなく、気持ちも子どもから離さないような配慮が見て取れた。

【約束事を決める】では、「遊び始める前に場所や物の危険や約束事、注意点を伝える」ことや、「おもちゃの遊び方や順番を決め、約束事にしていた」ことで、子ども自身がルールを知り、守ることの大切さまで知る機会づくりをしていたように考えられる。遊びの中でこのようなルールや約束事を身に着けることは、その後の社会性にもつながる重要な学びになるであろう。

【子どもの動きを把握する】では、「子どもが見える範囲で誰がどこで何をして遊んでいるか

表1 子どもが安全に過ごすための保育者の関わり

カテゴリー	記述数	記述例
声掛けによる危険回避	42	部屋の中では走らないように伝えていた 危険な場所があれば、子どもと一緒に確認して説明する 危ないこと、もの、場所には近づかないように声をかける 活動をする前に注意点を伝えていた 外に出るときは分かりやすく説明していた 危ないことをしていた時にはすぐによって声掛けをしていた
全体を見渡す	35	目の前の子どものだけに集中せず、全体を見守る 子どもの姿が全体的に見渡せるように体の向きに注意していた 全体を見て、子どものいる場所を確認していた 保育室でも園庭でも子どもたち全体が見渡せる位置にいた
健康を管理する	27	園庭だけでなく、室内にいるときも水分補給させていた 熱中症予防にこまめな水分補給をしていた 暑い日は日陰で遊ぶようにしていた おもちゃの消毒をしていた アレルギーの子どもの机を用意し、給食をダブルチェックしていた 感染者を他の部屋に移動していた 午睡時の睡眠チェックを5分おきに行っていた
すぐに手を出せる体制作り	23	子どもが遊ぶ近くで見守っていた 運動遊びの時に各項目に必ず保育者が一人いるようにしていた コーナー遊びをする時は一人が付いていた ハサミを使う時は必ず保育者がそばについていた 固定遊具や大型遊具で遊ぶときは保育者一人が付くようにしていた
目を離さない	18	年齢に合わせた保育者の数を配置し、常に目が届くようにしていた 担任が席を外す時は、代わりの保育者が交代していた 午睡中は子どもに背を向けず全体を見渡せるようにし作業していた 危なそうな時は目を離さないようにしていた 連絡帳など事務仕事の時でも子どもに背を向けないようにしていた
約束事を決める	17	遊び始める前に場所や物の危険や約束事、注意点を伝える おもちゃの遊び方や順番を決め、約束事にしていた 外の遊具で遊ぶときのルールを決めていた ハサミを使うルールを説明していた ハサミを使う時はグループごとに取りに行き混雑しないようにしていた
子どもの動きを把握する	13	子どもが見える範囲で誰がどこで何をして遊んでいるか把握していた 移動時は人数確認をしていた 子ども一人ひとりの動きを把握していた
子どもの行動を予測する	4	子どもの危険を予測した対策をしていた 靴下で滑らないように裸足にさせていた
子ども同士のトラブルを回避する	3	子ども同士のトラブルで怪我をしないようにしっかりと見守っていた 移動する時は子どもたちがぶつからないように動線を工夫していた

把握」したり、「子ども一人ひとりの動きを把握」するなど、全体の把握だけではなく個々の把握まで、バランスよく見渡している様子が見て取れる。

【子どもの行動を予測する】では、「子どもの危険を予測した対策」をしていた。中でも「靴

下で滑らないように裸足にさせ」るなど、子どもの動きだけでなく、身体バランスが未熟な子どもの危険を回避するための配慮をしていることがうかがえた。

【子ども同士のトラブルを回避する】では、「子ども同士のトラブル」に発展しないような見守り



や「移動時の動線の工夫」で子どもたちがぶつからない細かい配慮をしている様子が見て取れた。

## 2) 安全な環境の工夫について

子どもが危険に遭遇しないための環境の工夫については、自由記述により 178 の回答が得られた。回答の意味内容を変えないよう注意しながら、意味内容の類似性に従い分類し、抽象度をあげ 11 の【カテゴリー】を抽出した（複数回答有）（表 2）。

【角をガードする】では、「机の角をクッション材で保護」あるいは「スポンジ」や「柔らかい素材」で保護することで、子どもが角にぶつかった時に、大きなけがにいたらないような工夫が見て取れた。多くの園で同様な工夫が多く見受けられるが、園側でガードする以前に、家具のデザインや素材の安全性、保育現場との相性も考慮していくことが求められると考える。

【危険から遠ざける】では、「階段に柵があり、鍵が二重になっていた」り、「ドアのカギを必ず閉める」など、子どもがその先に移動し、危険に遭遇しないような工夫がされていた。

【危険物を管理する】では、「ハサミは鍵のかかるところにしま」ったり、「子どもが触って危ないものを手の届くところに置かない」など、子どもの目線や動線に入らないような工夫がされていた。また「消毒など危ないものは子どもの手の届かない場所に置いて」おくなど、日常生活で通常なら危険ではないものも、子どもにとっては危険になりうるものへの配慮をしている様子が見て取れた。

【行動範囲を決める】では、「目の届かないところに行かないように遊ぶ場所を制限」したり、「園庭を区切って遊ぶように声をかけ」るなど、子どもが安全であるということは、保育者の目線から管理しやすさにつながっていると考えていることが見て取れた。また、「子どもが密集しないように動線を決め」たり、「保育室の時間分け」をするなど、子どもを動かすことが環境の工夫だと捉えられていることもうかがえた。

【整理整頓をする】では、「使っていないおもちゃは片づけ」たり、「小さなものが床に落ちていたら拾う」など床で子どもが動き回った時にけがにつながらない配慮や、誤嚥につながらないような管理もされていた。

【転倒を予防する】では、「机や椅子を出しっぱなしにしない」ことや「子どもの通り道に物を置かない」ことで、子どもの動きを遮断しない配慮や、物で躓くことを予防したりなどの管理が行われていた。また、「階段の子どもを目線に手すりが付いている」など、子どもの発達に合わせた工夫も見えて取れた。

【誤嚥防止をする】では、「乳児が近くにいる時は口に入るサイズの物は近くに置かないように」など、特に乳児に対する配慮が多くみられていた。

【年齢に合わせる】では、「年齢ごとに遊ぶおもちゃを決めていた」り、「遊具によって遊べる年齢を決め」るなど、年齢による区分けをしているところが多くみられた。また、「年齢に合わせて椅子の高さを変えてあった」り、「0,1 歳クラスでは床に軟らかいマットを敷いて」いるなど、粗大運動に合わせた環境の工夫も行い、事故防止につなげていた。

【指を挟まない工夫】では、「ピアノのふたは必ず閉め」たり、「ドアが完全に閉まらないようにスポンジで隙間を開けていた」など、子どもが指を挟みやすい場所での細かな工夫をされていることへの気づきが多くみられた。

【落下を防止する】では、「高いところのものが落ちてこないように奥に置」いたり、あるいは「高いところに物を置かない」など、高いところから落ちてきたものが子どもにあたらないようにする工夫への気づきがみられた。

【見渡せる環境づくり】では、「子どもが見えるように仕切りの無い環境」や、「目の届かない場所を無くす」ことで、遮るものなく、室内や園庭を見渡せる環境の工夫をしていることへの気づきが挙がっていた。

表2 安全な環境の工夫

カテゴリー	記述数	記述例
角をガードする	35	机の角をクッション材で保護していた 角があるものにはスポンジを巻いていた 角がとがったものが無いようにしていた 角がとがったところには軟らかい素材の物を貼っていた
危険から遠ざける	21	階段に柵があり、鍵が二重になっていた 危ないところに入れないようにガードをする ドアのカギを必ず閉める 蜂やムカデなどの写真と「近づかない」と書かれたポスターが貼られていた
危険物を管理する	18	ハサミは先生の机にまとめて置き、一人ずつしまうようにしていた ハサミは鍵のかかるところにしまう 消毒など危ないものは子どもの手の届かない場所に置いていた 子どもが触って危ないものを手の届くところに置かない コンセントカバーを付ける
行動範囲を決める	18	目の届かないところに行かないように遊ぶ場所を制限していた 子どもが密集しないように動線を決めていた 園庭を区切って遊ぶように声をかけていた 保育室の時間分けをしていた 机で遊ぶ子ども、床で遊ぶ子どもで分けをしていた
整理整頓をする	17	ブロックなど踏まないように散らばっていたら片付けていた 使っていないおもちゃは片づける 小さなものが床に落ちていたら拾う 壊れたおもちゃは回収する
転倒を予防する	17	おもちゃの箱に乘らないように押し入れなどにしまう 机や椅子を出しっぱなしにしない 子どもの通り道に物を置かない 床の段差を無くしていた 階段の子どもの目線に手すりが付いていた
誤嚥防止をする	16	乳児クラスでは小さい物は子どもの手の届かないところに置いていた 乳児が近くにいる時は口に入るサイズの物は近くに置かないようにしていた 口の中に入る大きさのものは子どもの手の届かないところに置いていた
年齢に合わせる	15	年齢ごとに遊ぶおもちゃを決めていた 遊具によって遊べる年齢を決めていた 年齢に合わせて椅子の高さを変えてあった 0, 1 歳クラスでは床に軟らかいマットを敷いていた
指を挟まない工夫	8	ピアノのふたは必ず閉める ドアが完全に閉まらないようにスポンジで隙間を開けていた
落下を防止する	7	高いところのものが落ちてこないように奥に置く 高いところに物を置かない
見渡せる環境づくり	6	子どもが見えるように仕切りの無い環境 目の届かない場所を無くす

## 5. 終わりに

保育学生は実習の中で、子どもたちと真剣に向き合い、関わりを深め、そして保育者の実際

の保育を間近で感じながら、保育学生なりに、子どもの安全を守るための保育者の関わりや環境の工夫についての思いを巡らせ、保育者としての役割を捉えていた。

A 短期大学においては、全ての実習が終わった後に「子どもの健康と安全」の授業が組まれていることで、実習時点で子どもの安全な環境の工夫や保育者の関わり等についての知識や技術が十分に身についていないと当初考えていた。しかし、保育学生のこれまでの学びなどを統合し、子どもや保育への関心を高めることで、保育学生なりに心を動かし、保育をする上で大切な多くの気づきを得られるに至ったと考えられ、それは現時点における保育学生なりの保育観といえるのではないだろうか。保育観とは、保育をする上で大事だと思っていることで、特に保育学生の保育観は、自身の考えやこれまでの学び、実習における経験を通し、育まれていくものであると考える。そして保育観は「日々の保育における瞬時の判断や子どもへの援助方法、声かけ等を決定する大きな要素である」と松本(2019)は述べる<sup>10)</sup>。

また、実習後に「子どもの健康と安全」を学ぶことで、これからこの授業の中で自分が何を学びたいかということや、自分が学ぶべきことへの目標の形成にもつながっているという発言も聴かれていた。そして卒業前の2年生後期に本科目を修得することができたことで、今後の就職を見据え、子どもの安全を守るための知識が増え、自信が付いたなどの声も挙がっていた。と同時に今後は、カリキュラムを見直したり、1年次に修得する「子どもの保健」の授業内容を充実させるなど、実習という実践につながる学びを深めていくことの必要性も示唆された。

今回実習の経験を通し見えてきた保育学生の保育観を参考に、今後も保育学生という初学者の段階において学修や経験を積み重ね、保育観の方向を導いていけるような取り組みをしたい。保育学生が積み上げてきた保育観を大切にしながら、さらに発展できるような関わりを大切にしていくとともに、これからの保育の質向上に貢献していきたいと考えている。

## 謝辞

本調査にご協力をいただきました A 短期大学の保育学生の皆様に感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 厚生労働省編 (2018) 「保育所保育指針解説」, フレーベル館.
- 2) 文部科学省著 (2018) 「幼稚園教育要領解説」, フレーベル館.
- 3) 三宅美千代 (2021) 「こどもの育ちを守るためのリスクマネジメント」, こども環境学会.
- 4) 前田はる香 (2018) 「保育実習において学生が対応に困った経験: 子どもの保健に関連した内容について」『千葉敬愛短期大学紀要』40, 327-332.
- 5) 萱間真美 (2007). 質的研究実践ノート 研究プロセスを進める clue とポイント. 医学書院.
- 6) 木下康仁 (2014). グラウンデッド・セオリー論. 弘文堂.
- 7) 秋田喜代美・藤江康彦 (2019). これからの質的研究法—15の事例にみる学校教育実践研究—. 東京図書.
- 8) 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法 原理・方法・実践. 新曜社.
- 9) 日高友郎 (2020). 「オープンコーディング」. サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編. 『質的研究法マッピング』. 新曜社.
- 10) 松本佳代子 (2019), 「保育者の保育観に関する研究動向」『共立女子大学家政学部紀要』65.